

平成29年度 研究評価報告書【畜産試験場】

1 概要

試験研究開発の一層の効率化と研究ニーズに即応した新技術の早期開発を図るため、「福井県農林水産試験研究評価実施要領」および「福井県農林水産業活性化支援研究評価会議設置要領」に基づき、研究課題の選定、進捗状況と進行管理、研究成果および研究終了後の成果の普及状況ならびに研究機関としての活動状況等について評価を受けた。

(1) 開催日時 平成29年7月19日 9時00分～13時30分

(2) 開催場所 畜産試験場

(3) 評価会議出席者

① 評価委員

小迫 孝実 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構畜産研究部門
企画管理部長

高橋 正和 公立大学法人福井県立大学生物資源学部 准教授

山崎 洋子 NPO法人 田舎のヒロインズ

川口 孝誠 福井県第一食肉協同組合 理事（株式会社カワグチ 社長）

立尾 清美 芦原温泉女将の会副会長（芦原温泉白和荘女将）

岡本 吉央 福井県農林水産部食料産業振興課 課長

林 秀幸 福井県農林水産部生産振興課 参事（生産振興課 山本課長代理）

② 畜産試験場

向井 寿輔 場長

松井 司 家畜研究部長

加藤 実 管理課長

田辺 勉 企画支援室長

各グループリーダーおよび担当職員

2 評価結果

課題評価は、研究課題ごとに担当者から研究の背景、目的、内容、実施方法および成果などについて説明を行った後、委員との質疑応答により評価を受けた。

各評価委員の平均を総合評価とし、さらに指導、意見をコメントとして受けた。

(1) 研究課題別評価

事前評価：1 課題 B 評価

事後評価：1 課題 B 評価

追跡評価：1 課題 B 評価

研究課題別の詳細は、研究課題別評価結果に記載し、今後の研究開発の推進、成果の普及方法等に活用する。

(2) 試験研究機関評価 B評価

評価の詳細は試験研究機関評価結果に記載し、今後の場の運営、若手研究員の育成、広報活動等に活用する。

3 研究課題別評価結果

(1) 事前評価

1	研究課題	センシング技術を活用した若狭牛の効率的な増産技術の確立	総合 評価	B
	研究期間	平成30年度～平成34年度		
	研究目的 および必要 性	若狭牛の増産を進めるには、乳用雌牛への移植頭数増加と二卵移植による双子分娩の推進が有効であるが、発情不明瞭や双子分娩に伴う事故が障害となっている。これら課題を解決するために発情時期や分娩時刻を特定できるセンシング技術を開発する。		
	主な意見	<ul style="list-style-type: none"> ・ 必要性は非常に高いと考える。 ・ 工業技術センターや福井大学との連携を活かして頂きたい。連携を密にすることが大切。 ・ 課題内容からすると5年間という非常に短い期間で大丈夫かという懸念がある。 ・ 試験が始まってから課題が明確化すると思われる。 ・ 装置開発や実用化に至るには多くの課題があると思われる。(操作性、価格等) ・ 予備試験の段階で解決すべき課題が多く、実現性に疑問は残る。 ・ 成功すれば福井県に留まらず全国の畜産農家への波及効果が期待できる 		

(2) 事後評価

1	研究課題	夏場のグリセリン補給による乳牛の体温上昇抑制	総合 評価	B
	研究期間	平成26年度～平成27年度		
	研究目的 および必要 性	近年、暑熱に起因する乳牛の生産性低下が大きな問題となっている。ルーメンの発酵状態と牛体温の関係を解明するとともに、糖源物質を活用した体温上昇抑制技術を開発する。		
	主な意見	<ul style="list-style-type: none"> ・ 結果の取りまとめ方として、研究の面からは反復数やデータ数、標準偏差などが示されるとなよい。 ・ 年々重要性が増している暑熱対策の一つとして一定の成果を上げていると思う。 ・ 最近の傾向を捉えた課題であると思う。 ・ 7%の乳量増が農家にどの程度のメリットをもたらすのかは今後の普及にかかっている。 ・ 温度湿度指数 (THI) は暑熱ストレスの目安になるが、簡単に計算できない農家も多いと思う。普及の仕方が大切。 ・ わずかの波及効果であっても積み重ねれば大きなものとなる。 ・ きちんとまとめられているが、農家向けにはもう少し簡潔に取りまとめたものがあるとよい。 		

(3) 追跡評価

1	研究課題	乳牛への飼料用粳米（乾燥粳）多給技術	総合 評価	B
	研究期間	平成24年度～平成26年度		
	研究目的 および必要性	飼料自給率向上のため、トウモロコシなどに替わる穀物飼料として、水田を活用して生産できる飼料用米の利用推進を図るため、乳牛に粳米（粉砕した乾燥粳）を多給する技術を検討する。		
	主な意見	<ul style="list-style-type: none">・普及が一部に留まっているが輸入飼料を国産飼料に代替する取り組みは極めて重要である。・この技術を取り入れている農家においては、期待通りの成果があがっている。・飼料費が1割削減できるというのは良い。更なる普及に期待したい。・研究成果の実現化、波及効果にまで十分及んでいないことが残念。・なかなか普及しない理由である農家が抱える課題を解決していかなければならない。・34万円の飼料費低減が10万円の機械を導入して達成できるというのは現実的なラインと考える。・畜産農家だけでなく耕種農家との連携が図れる、耕種農家にとってもメリットのある取り組みだと思う。		

4 研究機関評価

1	試験研究機関名	福井県畜産試験場	総合評価	B
	研究期間	平成25年度～平成29年度		
	主な意見	<ul style="list-style-type: none"> ・ 限られた研究資源の中で県内畜産農家にとって重要な技術的課題対応している。 ・ 北信越畜産学会への発表は定期的に行われているが、出席学会や発表課題数を増やすなどして研究の高度化を図るべき。 ・ 消費者を意識した情報発信は評価できる。 ・ 若手への技術継承、若手育成は息長く続けて頂きたい。 ・ 成果やその産物（県産ブランド）を県外や都市部に売り出していけるよう県庁他部局との連携を望む。 ・ 国産飼料比率の向上は今後益々重要になる課題であるので、今後も継続し知恵を絞って取り組んで頂きたい。 ・ 地域密着の基本方針が必要である。地域、農村、食、農、環境などの大切さを研究の見地から発信する場であって欲しい。 ・ ブランドは地元が愛してこそ。都市部での販売に特化するのではなく必ず県内に普及して頂きたい。 ・ 課題設定を引き続きしっかり絞ること。研究し成果も出たが普及しない、ではもったいない。 ・ 経済的効果も意識した課題設定も重要。 ・ 畜産農家のみならず消費者や一般県民にも目を向けた試験研究への取り組みは評価できる。 ・ ふれあい等、役割が多岐に渡っていることも評価できる。 ・ 全国の研究者ネットワークでの情報交換を積極的に行うことが重要。 		

5 総括

- ・ 全体を見回して高齢化、担い手不足、気候変動や国際競争など全国と同様の課題を抱える中、限られた人員と資源の中で生産強化の取組みを進めていることが見て取れた。
- ・ そういった面からも、工業技術センターや福井大学との連携は非常に重要。発展的取組みとして評価できる。
- ・ 飼料用米等の利活用を進めることは言うまでもなく飼料自給率を高めるためであり、そのことは食料自給率の向上に他ならない。
- ・ 最新の研究トピックに対して、アンテナを高くして技術化していくことが重要。
- ・ 県内に普及していける研究課題に取り組んで頂きたい。